

スタンダード研究会会報

(2014)No. 24

2014. 05.24

目次

◆ 研究会発表要旨 … 3

第60回 (2013年6月1日 国際基督教大学)

- ・高木信宏「墓の彼方からの手紙—エッセル版『パルムの僧院』の編集をめぐって」
- ・下川茂「恋するドン・ジュアンの死 — ファブリスの永遠の愛 (続) 」

第61回 (2013年12月21日 京都大学楽友会館)

- ・柏木治「産業家と「考える階級」について」
- ・下川茂「<ウェストミンスター通りの娼婦たち>について」

◆ 書評 … 12

杉本 圭子

高岡 尚子著『摩擦する「母」と「女」の物語—フランス近代小説にみる「女」と「男らしさ」のセクシュアリティ—』

◆ 追悼寄稿 … 14

岩本和子「鎌田先生との翻訳と往復『書簡』」

山本明美「メタ思考の階梯」

寺西暢子「「パリで一番美しい場所」、Furstemberg の広場」

◆ 会員活動報告 … 25

◆ 編集後記 … 26

【研究発表要旨】

第60回 (2013年6月1日 国際基督教大学)

墓の彼方からの手紙——エツツェル版『パルムの僧院』の編集をめぐって

高木信宏

スタンダールの死後、遺稿や蔵書、手沢本等の少なからぬ貴重な資料の数々が保存され、今日まで伝えられたのは、作家の従弟にして遺言執行人であったロマン・コロンの功績である。もちろん彼の貢献はその事に尽きない。彼は朋友の没後ほどなく全集の出版を志すや、最初はピエール＝ジュール・エツツェル、ついでミシェル・レヴィと組み、後者と共に伝記や書簡集、未刊作品を含む最初の本格的な選集を出版し、19世紀後半にスタンダールの文声がいよいよ高まりゆく下地をつくった。とはいえ、この記念すべき作品集に瑕疵がないわけではない。エツツェル版、レヴィ版『赤と黒』に含まれる異文の分析によって明らかになったところでは、底本に小説第2版の本文を用い、初版との校合をなおざりにするなど、コロンの校訂には今日の学術的な規範から外れた恣意的な判断が働いたこともまた事実だからである。

同様のことはコロンが編んだ『パルムの僧院』にも認められる。彼はスタンダールが1840年10月にバルザックに宛てて送ったとされる書簡を収録したのだが、20世紀に入って実証研究者たちが詳らかにしたように、コロンが活字にした「手紙」とは、現在グルノーブル市立図書館が所蔵するバルザック宛書簡の三草稿を彼が組み合わせて作成した、いわば偽書にほかならない。しかしながら、なぜコロンが、今日我々の知るその実直な性格やキャリアにそぐわない行為に及んだのかという問題については、従来の研究では掘り下げて論じられることはなかった。また、「書簡」に関するヴィクトル・デル・リットの考察以降、現在まで両作家およびコロンに関する新たな知見が少なからず蓄積されてもいるだけに、我々は本問題の再検討を試みた次第である。

結論を先に述べるならば、スタンダールがバルザックに宛てて送ったとされる問題の礼状は、後者の元には届かなかつたと考えられる。そして前者から手紙の受け渡しを託されたコロンはその事実を知悉していたため、エツツェル版『パルムの僧院』の刊行に際して件の「書簡」を誰憚ることなく活字にしえたのであろう。コロンは書簡とバルザックの「ベール氏論」を併せて収録することで、両作家の小説観を対比することに成功したばかりか、存命中であったバルザックにスタンダールの「手紙」を書見させたのである。

かかる仮説を導き出すにあたって我々が挙げる論拠は次のようなものである——コロンがバルザックと手紙を交わすのは1845年以降であるが、文面からはそれ以前に2者の中で

面識があったとは考えにくい。このことは、バルザック宛書簡の受け渡しをスタンダールから託かったコロンの、その任を果たせなかったことを窺わせる。また、1846年に両者の交わした書簡中で「ベール氏論」掲載の許諾こそ問題になっているが、件の礼状に関してはまったく言及されていない。つまりバルザックが手紙を落掌したのが確かならば、とうぜんコロンはその借受と転写の許可を求めたはずだが、その痕跡が認められないのである。次いで、問題の手紙の送付時期に両作家が置かれた状況を再検証したところ、当時両者の間では文通がきわめて困難であったことが確認でき、この点からもバルザックがスタンダールの礼状を未落手だった蓋然性は否定できない。さらに我々が注目したのは、『パルムの僧院』の共同修正に関するバルザックの証言である。1846年1月30日付のコロン宛返信でバルザックは『僧院』修正協力のためにスタンダールと交わした約束について回顧しているが、肝心の時期には言及がないため、この証言を件の礼状との関わりにおいて解釈することも従来は可能だった。だが、近年明らかになった実証的な知見に照らすならば、約束が交わされた時期は1839年4月初旬に遡ると考えられ、翌年10月に書かれた礼状とは無関係だと推定できる。すなわち、この証言をもってバルザックが同書簡を落掌した証左とするのはむつかしいのである。

最後に、以上の論証を踏まえて、問題の「書簡」をあえて公刊したコロンの行為について付言するならば、拙速にセールスポイントを増やそうとする編者の功名心とは異質な、旧友ならではの意図、すなわちバルザックに謝辞と自らの創作観を伝えられぬまま不帰の客となった畏友の心情を汲み、彼に代わってその切望したところを実現しようとする献身的な意志もまた、その動機のうちには数えられるのではないかと考える。

恋するドン・ジュアンの死—ファブリスの永遠の恋（続）

下川 茂

前回の発表ではファブリスの側から『パルムの僧院』の結末を考察したが、今回はその補足として、クレリアとジーナの役割に注目する。

まず、ジーナだが、ジーナがサロンを開いたヴィニャーノは「ポー川左岸、カザル・マッジョーレから四分の一里」の「オーストリア領」にあり、ファブリスが隠遁する「パルムの僧院」は「サッカから二里」の「ポー川近くの森」にある。「サッカ」はサンセヴェリーナ公爵夫人時代のジーナの領地であり、カザル・マッジョーレとサッカとの距離は3kmほどでしかない。ヴィニャーノと「パルムの僧院」の距離は10km以内であろう。クレリアを失ったファブリスがパルムを離れ、サッカ近くの僧院を選んだのは、ジーナに自分の

死を看取ってもらうためではないだろうか。クレリアとの恋をジーナに妨害されている間もファブリスは常にジーナに従順な態度を取り続け、一度も彼女を憎んだことがない。パルムを離れて以来もとの母親的保護者に戻ったジーナとファブリスは、ファブリスの死までの一年間、毎日ともに過ごす時間を持つことができた。ファブリスの死の状況は詳しく語られていないが、恐らく僧院で死んだファブリスのもとをジーナは訪れ、その死を看取ったのではないか。十字架の下でイエスの死を看取る聖母マリアのように。ジーナがパルム近くに帰ってくるのは、ファブリスの死を看取るという重要な役割を果たすためである。

次にクレリアの役割をみよう。ファブリスのサンドリーノ誘拐計画に最初クレリアは反対するが、「ファブリスを余りに愛していた」ため、反対し続けることができない。サンドリーノが本当の病気になっても、計画を中止せず、聖母への誓いを破ってファブリスに姿を見せる。彼女はファブリスを息子よりも愛している。サンドリーノがファブリスにとってクレリアの代理だったように、クレリアにとってもサンドリーノはファブリスの代理だった。息子の死は、誓いを破ったことへの罰と考えるクレリアには、自分のファブリスに対する恋心が子供の死の原因だという自覚がない。「サンドリーノの病中、明かりのもとでたびたびファブリスを見、さらに白昼二度、それも恋心に我を忘れて彼を見さえし」たクレリアは、息子の後を追って死ぬが、ファブリスを愛することをやめず、「恋人に抱かれて死ぬ喜びを味わ」う。作者の愛好したツィンガレッリのオペラ『ロメオとジュリエット』で、ロメオがジュリエットに抱かれて死ぬように、クレリアはファブリスの腕に抱かれて死ぬ。ファブリスもジュリエットのようにまもなくクレリアの後を追って死ぬだろう。

ところで、サンドリーノの死からクレリアの死まで「数ヵ月」経っている。この「数ヵ月」をクレリアとファブリスはどのように過ごしたのだろうか。病気のサンドリーノは「美しい大きな家」に移されて、そこで死んだ。息子の死後、クレリアには罰として恐れるものは何もない。死までの数ヵ月、美しい大きな家で、クレリアとファブリスは、互いの間近い死を自覚しながら、それだけ激しく愛し合ったのではないか。そして、クレリアはファブリスへの「恋心に我を忘れ」ながら、ファブリスに抱かれて死ぬ。サンドリーノとクレリアは、おそらく、産褥に死んだスタンダールの母と死産児に相当し、クレリアに来世で再会することを望んで死ぬファブリスは、来世で愛する母と再会することを夢見たスタンダールである。

恋するドン・ジュアン、ファブリスの最大の恋の罪であるサンドリーノ殺しが可能にしたのは、母と愛し合い、母に看取られて死に、来世で母と再会する、という作者の夢の実現だった。

第 61 回 (2013 年 12 月 21 日 京都大学楽友会館)

「産業家」と「考える階級」について

柏木 治

本発表の目的は、スタンダールの政治的パンフレット『産業家に対する新たな陰謀について』*D' un nouveau complot contre les industriels* (1825) を出発点に、スタンダールの思想形成における「金」および経済思想と自由の関係について考察を加えることにあった。

もともと *industrieux* と呼ばれていた「産業家」を、サン=シモンが *industriels* という語で記述したことはよく知られている。また、この思想家が没した直後にプロスペール・アンファンタンとオランド・ロドリグが創設者となって株式合資会社を設立、直ちに機関紙『生産者』*Le Producteur* の創刊が予告されたことを契機にスタンダールがこのパンフレットを書き、*industriels* という言葉を用いることになった経緯も周知の事実だろう。ちなみに、合資会社の設立にあたってもっとも多くを出資したのは、銀行家ジャック・ラフィットであり、レオン・アレヴィが草した機関紙の「趣意書」においても、銀行家の役割の重要性はことさら強調されている。

「趣意書」に対するスタンダールの反応は、『ロンドン・マガジン』(10月11日)にみえるとおおり、自由な個人の自立が経済的基盤のうえに成り立つものであって、その基盤となるべき経済活動の自由もまた保証されなければならない、という自由主義的立場からのものであった。産業の発達は、原理的にまず個人の自由を出発点にするのであり、その意味で産業主義もまた評価されてしかるべきである。しかし、自由を愛する者であれば、産業家をもっとも尊敬すべきものとして讃えよ、というサン=シモンの弟子たちによる「尊敬の強要」には、個人の選択の自由を制限し、産業主義による支配と統制を匂わせるところがある。スタンダールが自由主義の支持者でありながら、自由主義的産業主義に対立せざるをえなかったのは、まさにこの点においてであり、「自由」の問題からであった。

ちなみに、このパンフレットの本文には「自由」*liberté* という名詞が 9 回あらわれるが(さらに註に 1 回)、そのうち 5 回は *un certain degré de liberté* や *cette portion de liberté* のように程度を示す限定詞に導かれている。産業家の自由は「ある一定の」自由でしかなく、他の個人の自由を制限するものあってはならないのであって、この時期スタンダールがシャルル・デュノワイエの経済思想に関心を抱いたのも、自由との関連において産業と道徳の問題が扱われていたからであろう。この経済学者は、産業に基づく社会では誰もが生産=労働によってのみ富むのであり、ここでは政治権力の特殊な意味合いは消滅する(「可能な限り多くの個人が労働し、可能な限り少数の個人が統治する」と言い、かなり過激な自由主義思想の顔を見せつつも、『産業と道徳』*L' Industrie et la morale*

considérées dans leurs rapports avec la liberté (1825) の冒頭に掲げられたエピグラフが端的に示すように、来たるべき時代の自由は「産業」と「道徳」の交差するところにのみ保証される (Nous ne devenons libres qu'en devenant industriels et moraux) として、道徳の問題を重視した。

パンフレットでは、産業の展開に必要な一定程度の自由が保証され、その範囲内で誠実に働くことによって国家から自立する産業家と、あたかも「自由」の使者でもあるかのように国家に代わって第一の地位を占有しようとする産業家を対置させ、前者の立場から後者を攻撃する戦略がとられている。「金のむこうに徳とよばれる何かがあって、幸福になろうと思えば時々はこの徳を思い出すことが必要である」というとき、この「徳」はデュノワイエのいう道徳と同義である (なお、「考える階級」が有するとされる 6,000 リーヴル (フラン) という年金額は、実生活でスタンダールがこだわり続けた金額であり、金と自由と徳との関係から分析すると興味深い)。

ところで、産業を基盤とする新しい社会における経済活動と自由の関係については、自由主義者のあいだでも大きな問題であり、王政復古を通じて大いに論じられた。19 世紀のフランス自由主義の胎動は、ナポレオンの失墜とともに始まるといってよく、帝政時代に隅に追いやられていた自由主義的傾向をもつ思想家たちは、1814 年を境として急に声をあげ (バンジャマン・コンスタンの *De l'esprit de conquête et l'usurpation* もそのひとつである)、自由と産業との関係を説きはじめる。経済学や社会論においても、数々の自由主義的な著作があらわれるが、なかでも重要なのがジャン＝バティスト・セーの『経済学概論』*Traité d'économie politique, ou Simple exposition de la manière dont se forment, se distribuent et se consomment les richesses* の第二版の出版であろう。初版は 1803 年であったが、ナポレオンに敵視されていたため、1814 年刊の第二版によってようやく注目を浴びるようになったものである。セーは、革命後、政治体制が再び革命前に戻ってしまった時代にあって、「産業」をキーワードに、生産発展の無限の可能性を強調して、啓蒙的合理主義の光に照らされた博愛的な功利主義を高々と掲げた。実際にこうした精神は、サン＝シモンやデュノワイエにも受け継がれている。

一般にスタンダールは経済学に関心が薄かったといわれるが、実際にはこうした著作をかなり読み込んでいた。また、同時代の自由主義陣営では、想像以上に産業主義を含む「経済学的」話題が日常的に渦巻いており (自由主義派はしばしば「産業派」*parti industriel* とよばれていた)、スタンダールがこれに無関心であるはずはなかった。銀行家ルーヴェンのみならず、「産業家 *industriels* から尊敬されたがっている」貴族を自嘲的に語るオクターヴ、「産業家 *industriel* であることに赤面する」レナール氏など、小説作品においても産業主義の話題は見え隠れし、伏線として巧妙に配置されている。いま一度、自由主義と産業思想の同時代的文脈からスタンダールの著作を読み返すべきであろう。

《ウエスミンスター通りの娼婦たち》について

下川 茂

Philippe Berthier は《Stendhal et les demoiselles de Westminster Road》in *Stendhal et l'Angleterre*, dir. Keith G. Mc Watters et Christopher W. Thompson, Liverpool University Press, 1987, pp. 295-304 において、『エゴチスムの回想』の中で語られるロンドンのウエストミンスター通りの娼婦たちのエピソードを取り上げ、スタンダールにとって、娼婦たちがメチルドに対する失恋の痛手を癒す「現実の、心の底に届く、最初の慰め」(『エゴチスムの回想』*Souvenirs d'égotisme*, éd. Philippe Berthier, GF Flammarion, 2013, p. 106) となった理由を詳細に分析した。

しかし、『エゴチスムの回想』にはベルティエが取り上げなかった記述があり、それらに注目すると、彼女たちの別の側面が明らかになる。

娼婦とスタンダールの性行為について具体的な記述がなく、ベルティエはおそらくなかったと考えている。しかし、スタンダールが寝室の灯りをつけておくことを望んだのに、相方の娼婦が「羞恥心」からそれを拒んだという記述がある。「灯り」の下での性行為は、前々回の発表で報告したように、『赤と黒』のジュリアン、『チェンチー族』の父チェンチ、そして『パルムの僧院』のファブリスが望んだものである。ベルティエの主張と異なり、スタンダールは娼婦と性行為を行ったのではないか。見ることにスタンダールのこだわりがそれを示しているのではないか。ベルティエは、スタンダールと娼婦の関係は非現実的な、神話的なものだという自身の主張に都合の悪いこの箇所を無視した。しかし、彼が強調する性行為の記述の不在は、小説中でスタンダールが性的事柄で多用する ellipse とみなすべきではないだろうか。

「非常に従順で、非常に善良な」のに、「羞恥心」から灯りをつけることに「決して同意しなかった」娼婦は、ファブリスの視線の欲望を長く拒否し続けたクレリアを思い出させる。スタンダールと娼婦の性交はファブリスとクレリアの闇の中で二年間続けられた性交を先取りするものではないだろうか。スタンダールは娼婦と「数晩」過ごした。私はベルティエと違って、毎晩スタンダールは彼女と暗闇の中で性交したと考える。だからこそ、この体験は彼にとって、メチルドから受けた痛手を癒す「現実の、心の底に届く、最初の慰め」となったのではないか。

しかし、娼婦とスタンダールの関係は持続しない。スタンダールの敵娼はクレリアのように誓いを破って姿を見せることはないが、スタンダールと共にフランスに行くことを口にする。スタンダールは妹ポーリーヌとの同居体験を思いだし、彼女をフランスに連れていくことを思いとどまる。ポーリーヌについての記述は容赦のないもので、彼女を「私の船底に煩わしくついた牡蠣」に譬えている。貧しく、従順で、善良で、羞恥心が強く、品の良い娼婦との関係は、彼女が現実的な欲望を口にした途端消滅した。ベルティエは『エ

ゴチスムの回想』の自身の版でポーリーヌに関する記述に注をつけて、スタンダールの利己主義を指摘しているが、恋愛関係においては例外扱いしている。このベルティエの主張は受け入れられない。スタンダールが恋愛相手の女性に対して、自分の自由を犠牲にするどころか、相手に犠牲を求めるのを常としたことはよく知られている。メチルドの場合は利己主義を発揮することもできずに終わった片思という例外だった。そして、メチルドに対してさえ、しばしば彼女の立場や思いを無視した振る舞いに出ている。ジュリアンやファブリスの恋も相手に犠牲を求めるものだった。パリでスタンダールを不能に陥れた、いかにも娼婦的なアレクサンドリーヌと違って、ウェストミンスター通りの娼婦は、その娼婦的でない性質でスタンダールに性的能力を回復させたが、現実的な欲望を口にすると、利己的なスタンダールは彼女との関係を断った。

ところで、『エゴチスムの回想』には、もう一箇所、見る一見せない、というテーマの変奏とみなすことができるエピソードがある。それは、1811年に、性病に罹った三人の上流婦人を医者連れて行き、そのうちの二人に目隠しをした、というものである。彼女たちは「羞恥心」から「発熱」し、医者は彼女たちの診察にあたって、患部しか見なかったとされている（『エゴチスムの回想』p. 141）。状況は全く異なるが、このエピソードには、クレリアとファブリスの闇の中の性交と共通する要素がある。

前々回の発表で、クレリアがファブリスを見ないためには目隠しすればよく、暗闇は必要ないことを指摘したが、このエピソードではまさに女性は目隠しをしている。女性はスタンダールが施した目隠しによって医師の姿を見ず（ファブリスを見ないクレリア）、医師は女性の下半身を見るが、女性の顔は見ない（クレリアを見ないファブリス）。クレリアーファブリスの場合と違うのは、医師が女性の下半身を見ることである。そのため、女性は「羞恥心」（Vergogne とスタンダールは大文字で強調している）から「熱を出して」いる。女性に付き添ったスタンダールの役割は大きい。目隠しは女性の「羞恥心」を守るためであり、決して女性を見ようとしない「完璧な紳士」の医者を選んだことも、女性の「羞恥心」とプライバシーを守ろうとするスタンダールの配慮だろう。女性の病気の責任の大半は男性にあるが、自分自身も含めてスタンダールはそのことには触れない。

ウェストミンスター通りの娼婦との闇の中の性交と、この目隠しした上流婦人の性病診察を、クレリアとファブリスの恋の結末と重ね合わせてみよう。

ファブリスを見ないと聖母に誓ったクレリアに、作者はナポレオン宮廷の貴婦人に与えた「目隠し」という、簡便な、実際的な手段をとらせなかった。「目隠し」を与える代わりに、作者はクレリアに誓いを拡大解釈させて（誓いはクレリアがファブリスを見ることを禁じているだけである）、ファブリスがクレリアを見てもいけないことにし、日中でさえファブリスがクレリアを見られないようにした。二人の性行為は夜闇の中でのみ行われる。その点は娼婦とスタンダールの場合と同じである。夜闇の中の性交は、娼婦の場合は「羞恥心」が原因だが、クレリアの場合は聖母への誓いが原因である。娼婦とクレリアには幾

つか共通点がある。どちらも、「臆病 timide」で顔色が「青 pâle」い。娼婦の「慎ましい décent」性格も、同じ語彙で形容されてはいないがクレリアと一致する。性交中以外は娼婦を見られるスタンダードと違って、クレリアの姿を全く見られないファブリスの不満は募り、彼はサンドリーノ奪取を企む。サンドリーノの病中、看病のために夜間灯りがつけられ、互の姿を見ることになった二人は、最後には、日中も互の姿を見、しかも愛を交わすようになる。「色事 galanteries」に耽るナポレオン宮廷の上流婦人と違って、ファブリスを情熱恋愛の対象とするクレリアは、「目隠し」という誓い守るための現実的な手段を取らず、またロンドンの娼婦と違って、性交時だけではなく、その他の時間も相手ファブリスから視覚を奪う。クレリアとファブリスのどちらにとっても相手の代替物である子供は、二人が誓いを破るために、病気にされ、誘拐され、二人が誓いを破れば、二人の死を導くために殺される。娼婦は「羞恥心」から決して性交時の姿をスタンダードに見せないが、クレリアは誓いを破って、ファブリスを見、ファブリスに見られる。子供の死を代償にして得られた、二人の白昼の性愛の快楽がこの上なく強烈なものであったことは疑いない。

『恋愛論』第26章「羞恥心について」には「羞恥心は男に自尊心を満足させる大きな快楽を与える。女が自分のためにどんな掟を破ったかを感じさせるから」、「そして女にはより陶酔的な快楽を与える。すなわち、女の快楽は一つの強力な習慣を破らせるから、いっそう魂を惑乱させるのだ。ヴァルモン伯爵が真夜中美しい女の寝室にいるとする。これは彼には毎週のことだが、女にとってはおそらく二年に一度起こることだ。従って、希な出来事であることと羞恥心が女の方にはるかに激しい快楽を生み出す筈である」と書かれている。

前々回の発表で報告したように、ファブリスの恋はクレリアを愛するようになって、そのドン・ジュアン的性格を失っていない。従って、クレリアが誓いを破ってファブリスを見、同時にファブリスにもその姿を見せたことは、ファブリスに極めて大きな自尊心の快楽を与える。それだけではない。恋するドン・ジュアンとなったファブリスは、ヴァルモンと違って、クレリアと愛人関係になるまでに、獄中で出会ってから少なくとも三年以上の歳月をかけ、しかも愛人となってからも二年間、闇の中でしかクレリアと会っていない。闇の中の性愛とは比べ物にならない、極めて「陶酔的」な快楽を彼は味わった筈である。クレリアの「より陶酔的な」「激しい快楽」は言うまでもない。

しかし、この状態は長続きすることはない。なぜなら、白昼の性愛も繰り返されれば「希な出来事」ではなくなり、その快楽は低下する筈だから。「二度」と限定されているのは、そのためだろう。恋するドン・ジュアン、ファブリスにクレリアが現世で与えることのできる快楽は白昼二度の性愛で絶頂に達した。クレリアにはもう死ぬことしか残されていない。そして、ファブリスは、死によって再び彼の視線の欲望を逃れたクレリアに来世で再会したいと願う。マドンナへの誓い、違反、息子サンドリーノの死、という出来事はクレ

リアの死を本当らしくするためのものに過ぎない。物語の進行を真に操っているのは恋するドン・ジュアン、ファブリス、そして作者スタンダールの、利己的な快樂の最大化の論理である。『恋愛論』第59章「ウェルテルとドン・ジュアン」の、「二週間おいかけて三ヶ月守る美しい女のそばで味わう快樂は、三年追いかけて十年守る恋人とともにする快樂とは違うのである」という言葉はウェルテル派からドン・ジュアン派に投げかけられた言葉だが、ファブリスのウェルテル的側面は彼にクレリアを「三年おいかけて」させたが、ドン・ジュアンの側面はクレリアを「十年守る」ことを許さなかった。しかし、それによって、彼は「三ヶ月守る」純粋なドン・ジュアンよりも、「十年守る」純粋なウェルテルよりも、はるかに強烈な快樂をこの世で得た。

【書評】

杉本 圭子

高岡 尚子著『摩擦する「母」と「女」の物語—フランス近代小説にみる「女」と「男らしさ」のセクシュアリティ—』晃洋書房、2014

おもにバルザック、サンドを中心とする19世紀前半の女性表象、男性表象のありかたを論じた本である。本書についてはすでに『ふらんす』5月号に小倉孝誠氏の書評があるように、女性の表象を論じるにはそれと対をなす男性像の検討が不可欠であるという認識に基づき、近年翻訳紹介の進んだ男性性(masculinité)についての研究(セジウィック、アラン・コルバン、ジョージ・モッセ)を活用している。スタンダールの作品については、女性表象のカテゴリーのうちの「浮気をする妻」で『赤と黒』のレナール夫人が扱われるほか(第1部第4章)、革命後に起きた男性性の変革(失墜)を受けての「母の息子たち」(第2部第4章)で『アルマンズ』のオクターヴとマリヴェール夫人との関係が扱われている。

女性表象を扱った第一部では微細をきわめた類型化の作業が行われ、19世紀のブルジョワ社会でよきモデルとされた「処女→結婚→貞淑な妻→出産→慈愛あふれる母」からの逸脱とその変種が、豊富な事例とともに示される。すなわち「未婚の母」、「産めない女」、「産まない女」、「浮気(adultère)をする妻」、「(適齢期を迎えた娘を)差し出す母」、「(娘の結婚を)阻む母」、「(かつて虐げられた自身の母の)名誉回復を果たす母」といったぐあいである。引証されるのはサンドの『ヴァランティーンヌ』、『アンディヤナ』、『ジャック』、『シモン』、『三十女』、『ウジェニー・グランデ』などで、こうして見てみると、フェミニストの先駆けのひとりであったサンドの書く作品がさながら、世紀前半の女性たちのたどった苦難の人生の見本帳のような様相を呈していることがよくわかる。

レナール夫人は恋する人妻、罪悪感にさいなまれる母親の典型として、『感情教育』のアルヌー夫人とともに分析の俎上に載せられる。ともに逢引の約束を前に子供が高熱を出し、それを天からの警告と受け止め、自らの命を投げ打つことが罪をあがない、子供を救うことにつながると思いこむ点で共通している。罪悪感が子供に転化されるという設定じたいが、既婚女性をしばっていた当時のブルジョワ的倫理観を体現していると、著者はみる。

かたやオクターヴは、ナポレオン時代の強い男性像が帝政の終焉とともに瓦解し、それにかわるモデルを模索することを迫られた貴族やブルジョワの青年のひとつの型として、サンドの小説『シモン』(1836)の主人公シモンとの対比において論じられる。彼らのかかえる「弱さ」は、家庭内で専制君主たろうとする生き方(家父長としての「強い男性」)ではなく、家庭内の女性(母や妻)と親和的に生きようとする道(現代日本の男性像にもつながる「優しい男性」)を選び取ったことからくる、必然的な「弱さ」である。理想の息子、

理想の夫であろうとするあまり、性的不能という秘密を抱えるオクターヴは自ら命を絶たざるをえない。いっぽうシモンは、母のすすめる女性フィアマと結ばれ、彼女の財産をあわせて労働者階級出身者のハンデを克服し、弁護士として成功する。

ところでこのふたつの小説の背景に1825年の「亡命貴族のための10億フラン賠償法」が共通してあることを、本書によってはじめて知った。身寄りのないアルマンも亡命貴族の娘フィアマも、この法律によって家族がかつて没収された財産を回復し、愛する男に財政的な援助をもたらすことが可能になるのである。

本書のすぐれた点はまぎれもなく、こうした細部にわたる作品のていねいな読みである。これによって同時期に別々に書かれた小説が思いがけぬしかたで結びつけられ、その時代特有の共通土壌をあらわにする。それと同時に、たとえば「世紀病」として通常ひとくくりにされる『ルネ』の症状と『世紀児の告白』のオクターヴの症状とが、その執筆時期（それぞれ1802年と1836年）からして同じ地盤に拠って立つものであるはずがないという、通説の再検討の余地も生まれる（第2部第3章）。ナポレオン軍の退役軍人たちが結ぶ固い絆の正体を、セジウィックの「ホモソーシャル」の概念を援用して説き明かすくだり（第2部第2章）なども興味深い。個人的な印象としては、ブルジョワ道徳に苦しめられる人妻・母の苦悩を分析した第1部は類型化に終始するあまり、やや新味に欠けるように思う。この部分は女の身体をめぐる当時の生理的、医学的言説を分析した小倉孝誠の一連の仕事や、「姦通」の法的、宗教（カトリック）的射程を洗い出した工藤庸子の『近代ヨーロッパ宗教文化論』（2013）のような著作と合わせ読むことによって、補完する必要があるだろう。またコーパスが19世紀前半の作品に偏っていることもあり、その前の時代—18世紀—からの連続性や、小倉孝誠の説によれば「姦通」の罪の意識が徐々に女の側から薄れていくという、19世紀後半—ゾラやモーパッサンの時代—にむけての展開が、十分には示されていない。世紀をまたいだ広範な視点が望まれるところである。

スタンダールは『アルマン』、『赤と黒』、『リュシヤン・ルーヴェン』の中で、ナポレオン軍のもと兵士、革命前の貴族、ナポレオン以降に生まれた青年といった、それぞれの世代を象徴する男たちを登場させた。その点、世代間の意識のずれや、それを支える政治的、社会的状況の推移に敏感な作家であったといえるだろう。本書を読むことによって、従来文学の社会学（sociologie de la littérature）の枠の中で、おもに世代論や階級論として論じられてきた部分にジェンダー論の新たな枠組みが与えられ、登場人物たちがさらなる奥行きをもった存在として立ち現れてくるだろう。

【追悼寄稿】

鎌田博夫先生（8月6日逝去、享年89歳）の思い出

鎌田先生との翻訳と往復「書簡」

岩本和子

鎌田先生はごく初期のころスタンダード研究会にご参加下さったと思いますが、その時の記憶は薄れてしまいました。私にとってはデル・リット『スタンダードの生涯』を共訳させていただいた思い出、いやそれ以上に、結局日の目を見ないで膨大な下訳原稿を手元に積み残した状態のまま今に至ってしまった“スタンダード書簡選集”作業を合わせた5、6年にわたる時間、しかもほとんどメールでのやりとりが先生との関わりのすべてです。この文章を書くにあたり、当時のメールのファイルが出てきたので読み返しました。ざっとですが百通くらい（手書きの手紙や企画書、作業分担表なども含めて）のやり取りがあったことにまず驚き、その後の雑多な日常に紛れて記憶から遠のいていた当時の状況が、慣れない翻訳に悩み苦しんだ気持ちとともに蘇ってきました。

その間に直接お会いしたのは一度だけでした。書簡翻訳の企画がやっと固まったころ、私も初めて法政大学出版局に赴き担当編集者と打ち合わせをした時です。会合のあと、東京駅新幹線乗場の八重洲口あたりのしゃれたカフェで確かシャンペンと何か高級なフレンチ系おつまみをごちそうになり、プライベートなことも含めてゆっくり楽しくお話させていただきました。2003年のこの時先生は79歳、その若さとエネルギッシュな姿勢に驚愕し、そして（スタンダードをやっているのに）私自身人生を楽しむことを「うっかり」忘れていたことにも気づかされた印象深いひとときでした。パソコンの新製品を次々と試され、東京に出たついでにマックの展示会に行かれたり、ネット検索の便利さを説かれたり、新しいことにも果敢に(?)挑戦されるのでした。『スタンダード—夢と現実』などのご研究がありますが、東北大学を定年退職されてからは翻訳の仕事を精力的に進められているということでした。『語りは畏』『古代ローマの恋愛詩』『パンと競技場』など10冊を優に超えます。お会いした時も実は並行して中世ものと『乗馬の歴史』を翻訳中、またデュシヤン論も仕上げ段階でした。専門から離れたものばかりなので、久しぶりにスタンダードに戻れるのが嬉しいとも言われました。

書簡翻訳をいったん中断して『スタンダードの生涯』翻訳を終える頃、奥様ともども体調を崩されてメールで弱音も吐かれることも少し出てきたころ、書簡選集は出版社の事情でということでしたが立ち消えになりました。先生にもう一度お会いしたいと思いつつあまりに早く月日が流れ、訃報に接してかなわず、不義理をしてしまったことと、書簡選集

の今後についてのご相談もできなかったことに、後悔だけが残ってしまいました。

作家の書簡や日記などを後世の人は読んだり訳したり研究したりしますが、実はそれを書いた作家本人はおそらく一生の間にいちども読み返さず、すっかり忘れながら人生を先へと進めていったのではないのでしょうか。鎌田先生とのメールによる往復「書簡」を、先生へのこの追悼文執筆の機会に読み返すことになりましたが、もしかするとそのまま一生忘れていたかもしれません。それはアンリ・ベールの書簡テキスト読解とも重なるという思いがけない感覚にとらわれています。なにしろ鎌田先生のメールには毎回10～2, 30行びっしりと、翻訳書の方針や構成、訳し方の細かい指示、また、そもそも翻訳とはといった自論や近況も書かれていましたし、先生との仕事を通して私は実に多くのことを教えていただいたのだとわかります。私の方もその都度細かい相談や提案、進捗状況の報告をしていて、今それを興味深く読んでいるのです。以下では、先生のメールから少しずつ抜粋していくことで、当時の歩みを振り返っておきたいと思えます。

2000年12月4日「…長年、スタンダールに親しんできた者として、スタンダールの「書簡選集」、たとえば「愛する人々へ」とか「親しい人々へ」というような形で翻訳を考えているのですが、まず、すでに、おなじような訳書が出版されているのでしょうか、また出版計画があるのでしょうか。…」：この日ははじまりです（岩本）

2001年2月6日「スタンダールの書簡を次のように分類して、時代的に、かつ要素的に選択してみてもどうでしょうか。たとえば、可能なら、1）青春時代 2）王政復古時代（旅行記や絵画史、音楽論） 3）七月王政時代（『赤と黒』や『パルムの僧院』など）、…」：まだ準備段階です

2001年6月21日「小生の77歳の誕生日を記念して、3日間、東京で買い物をしたり、グルメ嗜好の食べ歩きをして一昨日帰宅し、…」：先生は確かにグルメ嗜好でした

2001年8月31日「1年半か2年くらいかけて、読者に喜んでもらえるような訳業をめざしてがんばりますから、どうぞよろしく。…きょう、やっと『マルセル・デュシャン』という本の最終的な翻訳作業を終え、これは9月下旬にでるようです。他方、いま、仙台にきているフランス演劇家の原稿「イズミ、一レンヌ・仙台、姉妹都市物語」の翻訳も済ませました。まだ、古代史の専門家の自伝の訳が半分残っていますが、これはスタンダールの書簡と並行して進めたいと思います。」

2003年3月14日「…小生としては、あくまで興味深い「読み物」として一般の読者が読み始めたら、止められないようなもの、つまり小説家であるとともに手紙の発信者としてのスタンダールを「手際よく」まとめるつもりが、こんなに難しいとは予想できませんでした。」：読者に喜んでもらえるものを、とは何度も繰り返しおっしゃっていました

2003年3月14日（同日の長いメール）「…来年は80歳という坂にさしかかりますので、体力がいつまで続くやら心配です。いまでは絶版になっていますが、むかし拙訳の『赤と黒』を2出版社（新訳と改訳）から、『パルムの僧院』を1社から出し、ほかに「世界文豪

双書」の中の『スタンダール』などを訳したことがあります。ここ10年のあいだはまったく文学とは無縁の、主として歴史や自叙伝や芸術論の専門書を10冊ほど訳してきました。しかし35年以上も親しんだスタンダールを久しぶりで訳す機会に恵まれ、できるだけ「文学」の世界にもどる努力をしますので、どうぞよろしくお願いいたします。」

2003年11月19日「12月1日（月曜）15時に法政大、出版局でお目にかかれるのを楽しみにしています。…とにかく下車駅は「市ヶ谷」です。快速は止まりません。なお、11月30日に銀座で、日本で初めてのアップル直営店が開店しますので、見物しにいきます。」

2003年11月26日「若きベールが妹に書き送ったように「自分の精神の歴史」を中心にして書簡を編集するなら、「往復書簡」でなく、もっぱらスタンダールの書簡を中心に編集して、一種の「精神的自伝」を明らかにしてはどうでしょうか。もし往復書簡のような形式で「書簡集」をまとめるなら、たんに文学史的興味の資料的編纂にすぎなくなるでしょうから。…とにかく本は一般読者の立場に立つことも必要ですから。文学研究上の資料になるような書簡集はヴォルテールをはじめ、フロベールやサンドや、その他、大勢の作家の書簡集でたくさんあり、スタンダールの書簡の場合も、当時、誤解され、無視されたスタンダールの小説とおなじ運命をたどったような印象を受けます。」

2003年12月20日「ぼつぼつ始めていますが、ベールのみならず、バルザックもメリメもサント-ブーヴ、その他も、それぞれ想像していた人物像より「醜く」感じられることがあります。あまりにも長いあいだ、文学作品だけを通して勝手に想像していたのですね。まだ日記の方が美しい姿のようです。」

2004年6月17日「ところで、万事「待たされて」、いらいらしているうちに思いついたことですが、この機会に「本格的な」「スタンダール伝」を翻訳してはどうかと思いつきました。日本では、幸か不幸か、まだ出版されていないと思いますので。そして早速、法政大、出版局の平川さんにメールを送って打診したら、「スタンダールは、伝記としてもおもしろいでしょうね」という返事がきて、…」：評伝翻訳のきっかけ

2004年8月17日「…先日、デル・リットーの「逝去」を知らされ、小生の知るかぎり、かれの著書が一冊も邦訳されていないと思ったので、あらためて法政大、出版局の平川編集長に『スタンダールの生涯』の邦訳について再考を求めたら、オーケーの返事が今朝届いていましたので、改めて、優先的に（つまり「書簡」の訳に先立って）この訳業で協力をお願いできるかどうか、おうかがいいたします。…」

2004年8月20日「…当方はお察しのとおり「毎日が日曜」ですので、この「日曜」をフルに活用したいという気持ちから、朝は5時から「校正刷り」やフランス図書を眺めながら、パソコンに向かっています。最近では音楽でも聞いていなければ、気持ちが落ちつきませんので、iPod 40G b に1500曲近い音楽を収録して、そばでPower Book G4 (OS: Panther) の別注スピーカー2台から流れる音楽をききながら仕事を続けています。」：鎌田先生のお仕事ぶり！

2004年11月2日「ちょっと、こちらの「流儀」をお知らせしますと、小生は訳し終えた原稿を、家内に頼んで、ざっとキーボードのキーのミスタッチを見つけてもらい、訂正した上で、すぐ編集局へ送り、初稿の段階で、原書と厳密に照合しながら、「真っ赤に」なるほど修正します。というのも少し時間をおかなければ、客観的に自分の訳稿を、他人のもののように冷静に見直せないからです。これは習慣ですので、ご了解ください。」：私の原稿も、見本として初めの数ページだけですが、「真っ赤に」添削していただいたことがあります。それに倣って苦しんで推敲を重ね、それでも拙いぎこちない訳文で今読み返すとまた落ち込みます。

『スタンダードの生涯』出版は2007年3月でした。

西川長夫先生（10月28日逝去、享年79歳）を偲んで

メタ思考の階梯

山本 明美

1934年、移民の子息は大日本帝国の属領、朝鮮・平安北道江界郡江界邑石古洞で生まれた。1945年11歳で終戦を迎えると、シベリアに連行される父親と別れ、「一年近く[強制収容所に]抑留された後、脱出して数日間、母と二人で山中をさ迷い、なんとか三十八度線を越えて」日本に引き揚げてきた。満州軍幹部がソ連の対日参戦を察知し秘密裏に内地に帰還したため数十万もの引き揚げ者らに悲惨が降りかかったのであれば、人生の門口で命辛々越境した体験は少年の身体と心に、国家の専横が惹起する国家間・国民間の格差の記憶を沁みこませ、強靱な気概を培わせたに違いない。

中学生になった彼は、『パルムの僧院』の映画と小説に「衝撃的な全く新しい世界」を見た。この啓示に導かれて、彼は「われわれが依然として悩み苦しんでいる現代の諸問題」と向き合い、自らの視野を広げていった。高校生の彼はどの大学に進むべきか針路を迷わなかった。スタンダードと国家の交点には、京都大学人文科学研究所の桑原武夫らが「知の巨人」と仰いだルソーがいる。青年が入学する3年前の1951年に桑原は「歴史と文学」でこの両領域を往還する諸作品を夥しく拾っていたし、同年の『ルソー研究』では、桑原が共同研究班長として啓蒙思想の討論を主宰した成果を発表し、1954年には、ルソーが来るべき国家像を示した『社会契約論』を翻訳し、1959年にはフランス革命を近代国家の最初のモデルと位置づけて『フランス・ナショナリズムの展開』を刊行していた。

共同研究を束ねる桑原らの感化もあろう、彼は議論の意義を引き受けた。1960年、学部生の彼は先ずスタンダール自身に挑む。卒業論文を「スタンダールのボナパルティズム」と題し、冒頭に作家の言、「[スタンダール]が尊敬した唯一人の男、それはナポレオンである」を掲げる。自由主義者スタンダールと独裁者ナポレオンとの矛盾を問題視する論文だった。このため、彼は文学から歴史、政治、社会へと越境していった。

1967年から2年程パリに留学した彼は学生革命の只中にある。「時には彼らと一緒に走ったり叫んだりしながら、これまで異国の事件として書物の中でしか知らなかったフランス革命をパリの街頭の感触のなかで考えるという貴重な体験を得た」。彼は両革命間に階級間格差という共通の動因を見、後年、スタンダリアンらしい範列化による比例式で示す。すなわち、「大学という制度の中では、教授に対して学生は[ハンス・ロベルト・]ヤウスが「第三階級」と呼んだ「読者」ではなかったか」と考察する。

1984年50歳の彼が著した『フランスの近代とボナパルティズム』では、従来のボナパルティズム研究がテキストの部分的な分析に終始しているのに対し、「テキストと現実の歴史過程」、「理論と実践」の往還、及び「それに対する自分の立場を明確にする」企画を自らに背負う。彼は高等研究院(Ecole pratique des hautes Etudes)における彼の指導教授、ロラン・バルトが彼のナポレオン伝説研究に「集合表象」の語を適用したのに感服する。彼の背中はどうして押され、メタ論考のステップを踏んでいったのであろう。

1989年、「フランス革命200周年記念世界学会」で彼はついに30年来の疑問であったスタンダールの矛盾を乗り越え、「フランス革命の最大の帰結は『国民国家』の形成に」あり、「フランス革命の完成者はナポレオンである」という見解に至る。同年、国内開催シンポジウムに参加した彼は「スタンダールによって再び生きられたフランス革命」と題する発表において、「ミラノ人」を自認する作家の有名な墓碑銘は、「強烈な反ナショナリズムであると同時に、nationを超える方策」とし、「スタンダールの革命後の戦後教育(Ecole Centrale)」と彼自身が受けた「日本の戦後教育」の近似性を指摘する。この時、会場にいた某大使から「ウラル山脈の東には文明は存在しない」と反発される。彼は、「文明化の反面は侵略であり、植民地化である」と断る。

退職後の2011年、彼は43年前の体験を振り返って『パリ五月革命・私論』を著し、現代世界で今まさに進行中の諸情勢について所見を示している。例えば、チュニジアから勃発した「アラブ革命」の背景には「新自由主義的なグローバル化が周辺部に及ぼした経済の深刻な状況」があり、彼には「六八年五月」を想起させること、また、「東日本大震災と福島原発が図らずも暴きだした」のは「被災地における国内植民地的状況」であると述懐している。

西川先生を追悼するこの場をお借りして、先生が峻厳な高峰の登攀にも似たメタ論考をどのように実現していかれたか、それを推し測り辿ってみた。西川先生のメタ論考にはス

スタンダードから学ばれたものもあろうと思われるからである。スタンダード小説における風景描写には、例えばファブリスが夜陰にまぎれ丘に腰をおろし眺める、二つの湖を分けるアルプス山脈の一支脈など、境界によって隔てられる複数領域を同時に視野に入れる情景がある。これはプロットの予告とともに、主人公らが日常茶飯の瑣末を捨象して物事の筋道を想起し自らの今後の行動方針を確認する契機として機能していく。これに、作家が日記や自伝に描きこんだ平面図、遠望図といった見取り図を加えてもよく、多分に図式的であり、メタ的である。こうした広角な視野が可能にする骨太の状況把握が前述したスタンダード流比例式の土台になっている。片や、西川先生は例えば、『ミラノの人スタンダード』（1981）で「樹木」のテーマを論ずるにあたって関連諸研究を通読する必要を感じながらも、「そうした基礎的な準備に長い年月を費やしている間に、最初に作品から受けた新鮮な印象やそれに触発された問題意識の方が色あせてしまう」懸念を隠さない。当時既に30余年のスタンダード読書歴を経て、自らの人生のスパンと問題意識の鮮度を両天秤にかけ、メタ論考の階梯を踏むことになった要因であろう。

メタ論考が足掛かりにするのは、専門を超える「超域」である。メタ論考は、画家が時々自ら制作中の絵から遠ざかってキャンバス全体と絵画の対象とを新たな目で照らし合わせるように、平地に展開した論考を高所から眺め、周りの景色を視野に入れつつ枝葉末節を遠景にかすませて自らの主題を、対象が現す実際のありさまによって検証する作業である。そのため、自らの立ち位置と現実との新鮮な接触感覚を失わず問題意識を明確にする力になる。西川先生はそれをご教示下さっているのではなかろうか。

【上記以外の主要文献】

西川長夫「日本におけるスタンダード受容の問題：〈私〉はいかにスタンダードを読んだか」、『受容から創造性へー日本近現代文学におけるスタンダードの場合』、ジュリー・ブロック編、高等研報告書1202、2013年、pp. 47-54.

【Résumé】 Pistes méta-champs de Nagao Nishikawa (1934-2013)

L' idéologie de Monsieur Nishikawa est empreinte de franchissement de la frontière, depuis son évasion de l' internement de la Corée, obligée par la défaite du Japon en 1945. Sa rencontre avec Stendhal qui lui a révélé un « nouveau monde », élargit sa vue, rendant visibles simultanément plusieurs champs, séparés par les frontières entre des nations ainsi qu' entre des champs de recherches tels que la littérature, l' histoire, la politique et la société. Ses études méta- champs lui assurent ainsi de formuler son avis sur des « problèmes actuels dont nous souffrons toujours ».

Akemi YAMAMOTO

「パリで一番美しい場所」、Furstenberg の広場
——Quartier Latin で過ごした1989年のある夏の宵——

寺西暢子

「Y先生とはどのようなお知り合いですか？」

思い浮かぶふたつの光景がある。ひとつは、グルノーブル郊外、Gières のステュディオ。1986年初秋からの三年の滞仏期間の最後の年を、私は、そのステュディオで過ごした。その後、帰国前の夏をパリの大学都市の日本館で過ごす予定にしていた。父からの手紙を受け取ったのは、まだ、Gières のステュディオに居た頃だ。父の友人でもあり、立命館大学の国際関係学部で西川先生と同僚となられたY先生のご紹介があり、西川先生が夏に渡仏される際に、パリの私の元に連絡を下さるはずだ、と、知らせて来たのである。その後、西川先生のお手紙が届いた。パリでの連絡先が記されており、私の方に差し支えがなければ、ご連絡頂きたい、とのことであった。実のところ、西川先生には、それ以前にもお目にかかったことがあった。京都大学の博士後期課程に編入学した年の京都大学フランス語学フランス文学研究会の総会で、修士論文を元に、私は、初めての研究発表を行った。その際、総会に招待されて、講演をなさったのが西川先生である。私の発表後、同志社大学（当時）の山路先生からご質問を頂いた。更に、司会者は、その場におられ、著名な「スタンダード研究者」である西川先生を無視しては、失礼と感じたのであろう。私の発表について、先生のご意見を求めた。話を振られた先生は、少し、お困りになったようなご様子で、『イタリア年代記』の一連の作品と『パルムの僧院』をひと続きのものと考えておられるのでしょうか？』と言うようなご質問をなさった。それに対して、『カストロの尼』には、特に、『パルムの僧院』と共通する創作技法が見られるので、その観点からは、関連性があると考えている。」と答えたと思うが、正直なところ、かなりしどろもどろになっていたもので、あまりはっきりとは覚えていない。その後、懇親会も開かれたはずなのだが、その時、西川先生とお話したかどうかもやぶさかではない。当時の私は、先生のお人柄を知らなかったので、人見知りをして、多分、殆ど近寄ることもしなかったのではないか。

ふたつ目は、パリの日本館の電話の前である。共有スペースと居住空間を分けるロックのかかるガラス張りのドアを入った直ぐ右手に設置されていた。面識がないも同然の相手と電話で話す時、私はひどく緊張してしまう。その時も、西川先生からのお手紙に記された番号を押すのにかなりもたついた。やっと、先方のベルが鳴ったと思ったら、フランス語の、女性の声の留守番電話の録音が流れたので、番号を間違えたかと思い、慌てて切ってしまった。番号を再確認し、もう一度、数字を《 composer 》する前に、一旦、深呼吸した。再び、同じ女性の声の録音が流れたが、その途中で、今度は、ガチャガチャッと音がすると、受話器が取られ、男性の声が、それも、日本語で聞こえて来た。電話線の向こうにおられたのは、西川先生であった。

「貴女の声がとても明るかったので、とても楽しい滞在だったんだと思ったんですよ。」

西川先生が待ち合わせに指定されたのは、Saint-Michel 大通りと Saint-Germain 大通りが交差する北西の角にあった Café de Cluny である。私の方が先にカフェに着いていたように思うのだが、今、目に浮かぶのは、カフェのテラス席にゆったりと座って、アペリティフを召し上がっておられた先生のお姿である。京大の仏文研究会の総会や、お電話では、寧ろ、口下手な方とお見受けしたのだが、その印象とは裏腹に、Café de Cluny に来られた先生は、お話好きで気さくな方だった。その日、私は、パフスリーブの赤いワンピースを着ていた。滞仏中、携えていた数少ない「よそ行き」の服だったが、当時の年齢を考えると、いささか、子供っぽく見えたのかも知れない。また、あまりよく知らない人と会話をする時の常で、殊更に、外面を装っていたとは思ふ。そのせいか、西川先生は、グルノーブルでの留学期間を終えようとしている私に、そんな風に仰った。まだ、日は高く、幸い、その日は、とても良いお天気だった。その頃、私は、何とか D. E. A. を終えたものの、学位論文の方向性について、自分が本当に面白いと思うこと、やってみたいことと、文学研究の「本流」や、隣接する研究分野や方法論との関連性や距離等が十分に分からぬまま、試行錯誤している状態であった。だから、私の三年間のグルノーブル滞在は、先生が言われるような「楽しいもの」とは程遠かったので、先生の言葉に、私は、内心、苦笑するしかなかった。先生の本当のご気性をきちんと存じ上げていれば、素直に自分の抱えている問題を打ち明けても良かったのだろう、と、今になって思うが、その時は、当たり障りのない世間話でお茶を濁した。先生がそんな私の本心に気づかれたかどうかは、もはや、知る術はないが、先生は、終始、穏やかな口調で、機嫌よく会話を続けておられた。

「Rousseau がね、芝居が上演されている間、ここで、はらはらしながら、待っていたんですよ。」

Café de Cluny でのアペリティフを終えて、場所を移した先は、Odéon の先の Le Procope である。現在とは、多少、店構えが異なっていたような記憶があるのだが、そこでも、先生が選ばれたのは、窓が広く開け放たれて、通りの活気が感じられる一階席であった。シンプルにアントレとメインディッシュからなる「定食」を選んだと思う。今では、観光名所のようになっているが、当時は、他のカフェとそれ程、変わった風情はなかった。ただ、お料理は、寧ろ、あの頃の方がおいしかった。お恥ずかしい話だが、西川先生に連れて行って頂くまで、私は、この最古のカフェの存在も知らず、況して、そこで、「哲学者達」や「革命家」が集っていたことなど、全く、知らなかった。二階 (premier étage) に上がる途中にある、Voltaire の机もその時、教えて頂いた。だが、元「ベルばら少女」としては、化粧室のドアの《 Citoyens 》, 《 Citoyennes 》と言うプレートにはいたく、感激した。フランス革命二百周年の記念祭で賑わっている最中のパリである。あの年、パ

りで、(学生の懐具合では) 大枚を叩いて革命記念のロゴの入った傘を買った。赤と紺に白のストライプが入った柄、紺地に革命記念のロゴ、赤い肩紐のついた傘で、研究者の卵としてはいささか軽薄かも知れないが、三年間の滞仏の貴重な記念の品のひとつである。

「グルノーブルで何か面白い催し物など、ありませんでしたか？」

私は、そもそも、その夏、西川先生が、渡仏された理由をきちんと認識していなかった。また、日本の作家に関する先生の著作こそ存知上げていたものの、先生のご研究がどのように拡がっているのかも分かっていなかった。私にとって、先生は、やはり、著名な「スタンダード研究者」のおひとりであり、それ以外のお顔を想像したことがなかった。それは、丁度、私が卒論を書いていた頃、先生のスタンダードに関する御著書が二冊、刊行され、その内の一冊、『ミラノの人スタンダード』に収録された諸論文に深く、感銘を受けていたこともある。だから、フランス革命二百周年の国際学会に出席されるため、パリに来られた先生のご関心に適うようなお返事が、私には出来なかった。グルノーブル第三大学(当時)で開催されたスタンダード関係のコロックや、その当時、出版され、私自身、興味を引かれたスタンダードに関する研究書の話を書き羅列しただけである。先生は、幾分、がっかりされたようなご様子だったが、それでも、ゆったりとした穏やかな口調を崩されることはなかった。もう少し、色々、アンテナを張って情報を集めておけば…、と、私は、自分の関心領域の狭さを思い知らされた。

「以前、あるフランス女性が教えてくれた、パリで一番美しい場所に連れて行ってあげましょう。」

Le Procope での晚餐を終えて、そろそろ、帰宅時間が気になり始めていた私だが、それに気づいておられたのか、おられなかったのか、西川先生は、そんな風に切り出され、Odéon から更に、足を西の方へ向けられた。そして、連れて行って下さったのが、Saint-Germain des Prés 教会に程近い小路を抜けたところにある Furstemberg の広場である。こんなところに広場があるのか、と、思うような場所で、小路を抜けると、こじんまりした、しかし、しっとりとした雰囲気のある空間が、眼前に広がる。既に、日は落ち、広場にある洒落た街灯に明かりが灯っていた。

後日、偶然、パリの街中で、その Furstemberg の広場の絵葉書を見つけたので、御礼状にと、先生にお送りした。近年、先生にもう一度、お送りしたくて、随分、探したのだが、未だ、Furstemberg の広場の絵葉書は見つからぬまま、先生のご生前に差し上げることは叶わなかった。今度、渡仏する際は、せめて、「写ルンです」ぐらい買って行こうか。

「ちゃんと中に入って下さい。」

Furstemberg の広場から日本館に戻ったのだから、おそらく、メトロの四号線に乗り、

Denfert Rochereau で R. E. R. の B 線に乗り換えたはずなのだが、何処からメトロに乗ったのかは忘れてしまった。R. E. R. の乗り換え口で、それ以上の見送りを固辞する私をよそに、先生は、私と一緒に、大学都市の駅で R. E. R. を降り、日本館の前まで送って下さった。温泉旅館の出来損ないのような建物の前で、単調な御辞儀と御札を繰り返している私に手を振りながら、先生は、そう仰った。私が建物の中に入るのを見届けられると、安心されたのか、再び、軽く手を挙げて、ゆっくりとした足取りで、暗がりの中に消えて行かれた。先生は、多分、私がちらちらと腕時計ばかり見ていたことに気づいておられたのだろう。また、自分自身、教員を経験すれば分かることだが、教員の真情としては、やはり、女子学生（院生？）を、パリの夜の街をひとりで帰らせたくはない。当時の私が、そうした「親心」を理解していたとは思えないが、先生の紳士的な態度には深く感謝した。ひと言、「楽しい一日でした。」と申し添えれば良かったと、若かった自分の至らなさに苦笑いしている。

「感謝をこめて 西川長夫」

今年の2月下旬から3月初旬の二週間程をパリで過ごした。数年前から、パリ・オペラ座のバレエを見るため、パリ通いを始めたのだが、ちょっとした偶然から、Quartier Latin のとあるホテルを根城にするようになった。Roland Barthes が交通事故に遭った Rue des Ecoles を殆ど、毎日のように通る。オペラ座での観劇続きで、遅い朝食をホテル近くのカフェで取ったある日、Saint-Germain 大通りを西の方へ、ゆっくりと歩いて行った。かつての Café de Cluny は、Saint-Germain 側は、ピッツェリアに、Saint-Michel 側は、フランス系ファーストフードの Brioche d' Orée に変わっている。今では、Café de Cluny の文字すらなくなってしまったのだが、それでも、Brioche d' Orée の二階席に上ってみた。通りに面したふたつの窓の内、ひとつは古いフランス窓が残っている。その窓側の席に座って、Thermes de Cluny の庭に咲いた花を眺めながら、五月革命の只中、警官隊と催涙弾に追われ、この二階席に駆け上られる先生のお姿を想像してみた。更に、Le Procope から Furstemberg の広場へと足を向ける。広場の一隅の、一目で高級生地店と分かる店に、何か商品であろうか、小包を配達に来た移民系の若者がふたり、談笑している。

いつのお正月だったか、ふと、西川先生に連れて行って頂いた広場に、もう一度、行ってみたいくなり、お年賀状に「広場の名前を教えてください。」と書き添えたところ、早速、「Furstemberg という広場でしょうか。懐かしい思い出です。」と言うお返事を頂いた。その後、パリや、夏を過ごす信州から度々、お手紙を差し上げるようになり、先生からも時折、お葉書や抜き刷り等を頂くようになった。『パリ五月革命 私論』が新書版で、安くて助かった、などと、私が余計なことを書いたので、先生は、気を遣われたのだろう、今年の春、先生の最後の論集となった『植民地主義の時代を生きて』を、私に一冊、お贈り下さった。その御本に挿まれた「謹呈」の葉に先生の直筆で書き添えられたひと言が、先生から頂いた最後の言葉となった。当初は、1ユーロかそらの絵葉書と切手代で、大著を

釣り上げてしまったような気分で、ひどく、恐縮した。今、私は、先生が、後の世代に遺されたいと願っておられた「想い」の重みを、「大著」の重み以上に感じている¹。

¹ 今、現在、手元にある資料では、『パリ五月革命 私論』に記された先生のパリ滞在期間と、私が日本館に滞在したはずの期間が重なっていない。当時の agenda が見つければ、いつ先生にお目にかかったか分かるのだが、3月30日現在、確認出来ていない。

【会員活動報告】

井出 勉

- ・スタンダールとスペインⅡ —『ラミエル』：もう一つの『カルメン』—
名古屋造形大学 紀要第20号、2014年3月、95-109頁。

片岡大右

- ・「メーストル思想をシュミット流の「政治神学」から解放する試み」、『フランス』第88巻第12号（2013年12月号）、白水社、73頁（川上洋平『ジョゼフ・ド・メーストルの思想世界』の書評）。

山本明美

- ・追悼記事：In Memoriam Nagao Nishikawa.
- ・論文：Les *Memoires* de M^{me} Roland et l'energie stendhalienne.
ともに、*HB, Revue internationale d'etudes stendhaliennes*, no 18, Euredit, Paris, 2014, p. 7-8, p. 129-139. 所収.

編集後記

2013 年は鎌田博夫先生と西川長夫先生のお二人の訃報に接した悲しい年となりました。今号は、これまで日本のスタンダード研究を牽引してきたお二人の功績を偲び、寄せられた追悼文を掲載しました。著作でしかお二人のことを存じ上げなかった私にとっては、直接交流のある方々の寄稿を読み、研究に対する真摯な姿やそのお人柄に触れることができました。スタンダードという一人の人物を巡って集まる人々の縁、思い出、そして世代を超えた不思議な共感、何とも温かなものだと感じ、この研究会をこれからも持続させていきたいと改めて思いました。これまでの諸先輩方に混じって、鎌田先生も西川先生も、私たちより一足先に、あちらでスタンダードと直接会話を交わしているかもしれませんね。心よりご冥福をお祈りいたします。

(2014. 5. 24 角津 美愛)